

# 日本医史学雑誌 第五十三卷 第四号 目次

## 原著

近世日本の屍体供養……………香西豊子……………三二  
 清末刊行の中国文人体解剖学書について……………松本秀士……………五五

## 総説

中川五郎次による北方系の種痘法……………松木明知……………五九

——京都における日野鼎哉の最初の種痘法との接点——  
 シンポジウム「医史学と文学」——吉村昭氏を追悼して——

- 一、「医史学と文学」論序説——司会にあたって——……………岡田靖雄……………六二
- 二、吉村昭作品考 医学史関係……………酒井シヅ……………六三
- 三、医療史に支えられて時代小説・歴史小説をかく……………篠田達明……………六四
- 四、森鷗外の脚気問題と遺書……………荒井保男……………六五〇

## ひろば

「瘧」病攷……………小高修司……………六五九

## 資料

フランス人医師ムリエの養蚕研究について……………須長泰一……………六七三

——帝国動植物環境馴化協会の講演から——……………

## 記事

消息……………相良隆弘……………六七九

相良知安先生記念碑（東大附属病院構内）移転を慶ぶ……………

## 例会記録

書籍紹介

石田純郎著『オランダにおける蘭学医書の形成』……………  
 看護史研究会編 平野重誠原著『病家須知』翻刻訳注篇（上・下）研究資料篇……………  
 秦温信著『北国から、さわやかな風を』……………  
 文庫めぐり……………  
 九州大学附属図書館医学分館貴重古医書コレクション……………

日本医史学雑誌第五十三巻 総目次……………  
 日本医史学会会報……………

《本号の表紙絵》

Joseph Jakob Plenk 著

Lehrsätze der praktischen Wundarzney wissenschaft  
— dritte verbesserte Auflage — Wien, 1799

今回供覧する上の書籍は、直訳すれば臨床創傷治療学教則となろうか。この本については宮下三郎、石田純郎氏らの先行研究がある。

筆者は、この本の蘭訳本（1800年鏤行第3版）からの重訳本である新宮涼庭訳述の「布斂吉外科則」の写本も所蔵している。

そこで原著と重訳本においてどれほどの差異があるかを、序説（凡例）、基礎学（小則）、一般教則（大則）並に特殊教則（余則）の項で比較検討した。その結果、内容に大きな変更なく訳述されていることがわかった。「外科則」の余則の中、ケレフラレーキ病とは法律にかかわる創傷医学であり、ケレーキート則は詭弁と論述の技術に関する記述であることを知った。（裁判用か）

新宮涼庭が学塾順正書院において訳述した医書に「則」を多く用いたのは、この原著の Lehrsätze なる用語を大変好んだからではないかと思える。

ここに示した原著本はケルン市ホーエ通6番地の Günther Leisten 古物商店を経て筆者が入手したものである。扉の版画は腕に包帯を巻く情景らしい。

（中西 淳朗）

島田保久……………  
 石原建雄……………  
 坂井雄……………

六三六……………  
 六三八……………  
 六九五……………

六三三……………  
 六三三……………  
 六四四……………